ナイチンゲールにおける看護思想の基礎的視座

本　田　里　恵　　（062-825948-0）

放送大学大学院　　文化科学研究科

総合文化プログラム（環境システム科学群）

研究指導責任者　　多田羅　浩三　教授

研究指導担当教員　八木　洋一　客員教授

平成 22 年 12 月

copyright hocl 本田里恵

修　士　論　文　要　旨

学生氏名　　本田　里恵
所属プログラム　総合文化
（環境システム科学群）
学生番号　062-825948-0

ナイチンゲールにおける看護思想の基礎的視座

どの時代も人間はその時代自身が抱えた問題を背負って生きる。今、われわれがケアの現場で感じる問題も、その意味で近代化が孕む問題性であると言うことができると考えられる。しかし、近代化した社会に浸りきった人間はそのことに気づかない。そのような問題性を最も早く察知するのは、前近代から近代化に流れる時代のうねりを肌で感じながら、その意味を考え抜く人間であろう。その一人がナイチンゲールであった。そのような状況のなかで彼女は、人間の＜真理＞とは何かを求めたのである。そこで掴んだ真理は、「世界と人間」の＜いのちの営み＞は＜いのちの働き（＝統合化作用）（＝神の働き）＞の実現として「One」（作用的一）であるという、人間存在の根本構造として「自覚」されるものである。この「宗教的真理になる」という具体的な生き方の実践が、ナイチンゲールにとっては「看護」であった。

copyright hocl 本田里恵

ナイチンゲールは産業革命と共に浮き彫りになった非科学的、非人道的な人間の＜いのちの営み＞を、看護、保健、福祉の近代化によって改革していった。その貢献は周知のとおりである。従って、ナイチンゲールの宗教的＜真理＞とは科学と矛盾するものではない。それは科学も含めて人間の＜いのち営み＞の根拠を問う、宗教として成り立つものである。

しかし、当時すでに客観的な近代の知の肥大化は、自覚の知として成り立つ宗教を排除するように発展し始めた。そのような思想に基づく看護実践は、単なる自我の欲望を充足するシステムとして機能する結果を招くことになる。看護がそのようになってしまう近代の状況に対して、ナイチンゲールは 100 年以上前に「看護の危機」であると警告していた。それにもかかわらず現在のケアの現場では、看護の担い手の在り方という「自覚」の問題が、きしみ（看護の危機）として深まる一方である。この状態を解決する鍵となるのが、ナイチンゲールにおける看護思想の根底をなす自覚としての宗教であると考えられるが、すっかり近代化してしまったわれわれの思考では、ナイチンゲールの宗教の言葉を理解することができない。

本論では、キリスト教の言葉で語られたナイチンゲールにおける看護の基盤を、宗教哲学者である八木誠一に依拠し「場所論的宗教哲学」とその「記号論」から読み解いた。すなわち、ナイチンゲールにおける看護は、現代に通用する人類に普遍的な「場所論的ケア」として理解することができるのである。われわれが場所論的宗教性を理解し、それに基づく看護を行うことによって、前近代及び近代の問題性を超えたケアの地平を開くことができるというのが、ナイチンゲールの看護思想である。

copyright hocl 本田里恵